

しばらく前に、たしかテレビの影響で、よく小学生たちがからす、なぜなの？からすの勝手でしょう：

という替え歌のようなものを歌っていた。それとは違うが、最近、下の娘が歌を歌うとき、歌詞を否定に変えるということをささやかな「マイ・ブーム」にしている。ときどき、父親もいっしょになって、なんでも否定にしてみちゃくちな歌を歌って遊んでいる。

からす、なぜ鳴かない、からすは山に、かわいくない
七つの子がないからよ。

という具合である。「かわいくない七つの子がないからよ」などというと、解釈に手間取って頭の中がこんがらがってしまふ。そういえば近頃の若者言葉ではやっているという、「つまらなくくない？」のような表現も否定の否定ということであれば、肯定であるはずだが、要するにどう答えるというのかわからない。

また、否定文になると、言葉の意味はわかってても、その「真意」がわからなくなってしまう、意味のある文としては成立しないこともある。

かわいい、かわいい、とからすは鳴かない。

などとなってしまうと、何を主張したい歌詞なんだかわから

なくなるから不思議だ。「鳴かない」のなら最初から言うなよ、と言いたくなってしまう。否定表現にはいろいろな意味での難しさやややこしさがあるが、なかには、否定にすること自体ができない文も存在するのだ。

否定表現というのは、基本的には、何かの下敷きがあるのがふつうである。そして、その中で、どこか「ここは違う」というところが否定として表現され、その結果、なんらかの情報が残されることになっている。否定文では、

わるいことをする↓わるいことはしない

のように、助詞の「は」がよく使われるが、これは、「は」という助詞がほかと区別してとりたてるような意味を表すことと無関係ではない。

その意味で、否定されることと否定されないことが一種のペアの関係になるからこそ、否定文としての「意味」がでてくると言える。なんの前提もないところでいきなり否定文だけが使われると、情報として残るものがなくて、最終的に何が言いたいのかわからなくなってしまうことがあるのだ。したがって、例えば、中華料理店へ入って、テーブルにつきなり、

私はレバニラ炒めは注文していない。

と言うなら、それは明らかに変なお客である。論理的には、

今来たばかりだから何も注文はしていない。当然、レバニラ炒めも注文していないと言えるのであって、論理的にはまことにごもっともな「正しい」主張である。しかし、下敷きとなるものが何もないのにこのような否定をしてしまうと、「じゃあ、何なの？」と言わなければならなくなってしまう。常識的に考えて、この文が発話される状況とは、例えば、何かの手違いでレバニラ炒めが運ばれてきてしまったような場合とか、「レバニラ炒めは注文したか」などと聞かれた場合とかである。「何かを注文した」といったことを前提として、あるいは、「レバニラ炒めを注文したかどうか」を問題にした上で、「レバニラ炒めは注文していない」という否定表現がはじめて「意味」をもつわけである。

同じ理由で、物語の始まりも基本的には否定できない。例えば、

メロスは激怒しなかった。

という調子では、いきなりずっこけてしまふ（あるいは超高度なテクニクなのかもしれないが）。物語の始まりは、全体の設定や登場人物が初めて出てくる場所。なんの下敷きもない場所と言い換えてよい。そのような場所でききなり否定表現を使うと、情報として残るものがなくて、いったい何が言いたいのかわからなくなってしまうのである。いつか否定文だけを使ってお伽話おとぎばなしが作れたらおもしろいだろうななどとひそかに思っているが、当分完成は無理だろう。

比喩表現も基本的には否定できないという特徴がある。

例えば、

彼のそのときの顔は、まるで鬼のような顔だった。
という文を否定してみる。すると、

彼のそのときの顔は、まるで鬼のような顔ではなかったとなる。しかし、それだけ言うとなんか変な感じである。わざわざ「まるで鬼のような顔だ」という比喩で表現したいからそう言っているはずなのに、「くではない」という否定にするからである。もっとも、この文でも、例えば、「彼のそのときの顔は、まるで鬼のようだったか、まるで仏のようだったか」と聞かれたような特殊な文脈を考えると成り立つこともあるかもしれない（ただ、こんな刑事裁判の証言のようなことを日常言って生活している人は、おそらく、そうはいない）。

否定表現を計算にたとえると、「くはない」のように否定を否定したら肯定になるという点でマイナスのかけ算のようでもあるが、一方、もとにある情報から何かを「引く」という点では、引き算の表現とも言える。「ない」ってすごくくない？さて、連休の朝、娘は新たに「かえるの歌が聞こえてくるよ」という歌を否定にして歌い始めた。しかし、彼女は文章としての論理的整合性というものに、まだ気づいていない。

※ かーえーるの「歌があ、聞こえてくーこないー
げろ、げろ、げろ、げろ、ぐわっ、ぐわっ、ぐわあ
おい、おい、なんでやねん。やはり、否定表現は難しい。